10/27 号福

敦賀2号機 審査再開決定

規制委、改善を確認

データ書き換え問題

原子力規制委員会は二十六日の定例会合で、地質データに関する審査資料の不適切な書き換えが判明した日本原子力発電（原電）の敦賀原発2号機（敦賀市）について、資料の作成方法が改善されたとして、中断していた再稼働に向けた審査を再開することを決めた。審査を有利にするために意図的に書き換えたかどうかは「確認できなかった」とした。

規制委は、原電の社内規定には、審査資料に地質データを記載する際の明確なルールがなかったが、規定を改め、データを変更しないなどのルールを定めただけ、改善が確認できたとした。

原電によるデータ書き換えは二〇一〇年二月の審査会合で、規制委側の指摘で判明した。原子炉建屋直下の断層が地震を引き起こす活断層かを判断する重要な地点について、ボーリング（掘削）で取り出した地層の状態を、活断層の可能性につながる「未固結」から、可能性の否定につながる「固結」に書き換えるなどした。規制委は昨年八月、検査で資料の信頼性が確保されたと確認できるまで審査の中断を決めた。

敦賀2号機の原子炉建屋直下の断層は、規制委の専門家チームが活断層と指摘している。審査で活断層と確定すれば廃炉を免れない。規制委の山中伸介委員長は定例会後の記者会見で「審査はまだ入り口で、始まったばかりの段階」と長期化する見通しを示した。

市長「着実な審査 期待」

原子力規制委員会が日本原子力発電（原電）の敦賀原発2号機（敦賀市）の再稼働に向けた審査再開を決めたことを受け、同市の渕上隆信市長は二十六日、コメントを出し、原電に対して「改善された業務プロセスの元で作成した確実な審査資料を提出し、今後の審査に真摯に対応することで、原子力規制委との信頼関係を構築し、審査が着実に進むことを期待する」とした。

敦賀原発2号機の審査を巡る経緯

2010年2月	原子力規制委員会の専門家チームが2号機直下の断層を「活断層の可能性が否定できない」と指摘。13年5月に報告書まとめる
2010年10月	原電が再稼働に向けた審査を規制委に申請
2012年3月	原電が審査資料に誤記が931カ所あったと報告
同月	審査資料の誤記が計1139カ所に増えたと報告
2012年4月	原電による敷地内の地質データ書き換えが審査会合で発覚。原電の調査では書き換えは80カ所に上る
2012年7月	原電が新たな審査資料を提出したが、誤記や記載漏れが13カ所見つかる
9月28日	規制委が審査の中断を決定
13年10月26日	規制委が原電の審査資料の作成過程に改善が認められるとして審査の再開を決定

故意「確認できず」

原電の敦賀原発2号機の再稼働審査で起きた地質データの書き換え問題。規制委による検査は、書き換えの動機には踏み込まず、資料作成手順の妥当性の確認に終わった。故意だったのかがはっきりしないまま審査再開が決まった。

記者会見で、規制委の山中伸介委員長は「関係者への聞き取りなどから明らかな不正はなかった。検査そのものの目的は、事業者の保全活動が健全かを見るもの。不正をあばくものではない」と説明した。

昨年八月に審査の中断を決めた際、当時の規制委員長だった更田豊志氏は記者会見で、意図的なデータ改ざんが確認された場合は、敦賀2号機の再稼働申請を「不許可にする」と明言していた。

地質データの書き換えは、ボーリング（掘削）で取り出した地層の説明図で起きた。地層を肉眼で観察した結果、「未固結」と記載した部分について、原電は審査途中に顕微鏡で調べ直して地層が固まっていると判断を変えた。規制委に無断で「固結」に書き換えた。逆に、「固結」を「未固結」に書き換えた部分もあった。

検査に臨んだ規制委事務局の担当者は取材に「データを書き換えることは科学の基本としてあってはならないことだが、原電側にはそのような認識もなかった感触がある。意図的だったのかは確認できなかった」と振り返った。

（小野沢健太）